トラクレに学ぶ

【2024年7月号】

介護リスクマネジメントNEWS

入居者がいつのまにか骨折をしていた事例

入浴介助中に異変に気づき、「尺骨鈎状突起骨折」が判明

発生時・発見時の状況

サービス種別	入居施設	トラクレ種別	骨折	発生場所	不明
介護状況	不明	本人の状態	左肘に 腫れ・皮下出血 あり		

○Aさんは、S18年生まれ、事故当時80歳の女性。要介護5で、障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）はランクC-2、認知症高齢者の日常生活自立度はランクⅣであった。

○2月17日午後、入浴のため浴室でＡさんの脱衣介助をしていたケアスタッフが、Aさんの左腕の肘を中心に広範囲に腫れがあるのを発見。大きさは30㎝程度で、熱感と腫れがあり、左腕の外側が紫色になっていた。ケアスタッフがすぐに看護師に報告し、看護師は協力医療機関であるXクリニックの往診を依頼した。あわせてAさんのご家族にも連絡したが電話がつながらなかった。

○Xクリニックの医師が19時に施設を訪問し、Aさんの左上腕を診察したが、腕は伸展したままもどらない状態であった。医師より「近隣の総合病院の整形外科を紹介するので、明日朝一番でXクリニックに来てください」との指示を受ける。

○Aさんのご家族から20時ごろに折り返し連絡があった。Aさんの左腕の状況と医師の指示に従い、翌日受診することを伝えた。

○2月18日朝、管理者が同行してXクリニックを受診し、レントゲン撮影を行ったが骨折の所見はなかった。しかし、Aさんに発熱があったため、そのままXクリニックから紹介を受けたY総合病院を救急外来で受診し、「関節炎」と診断された。ご家族にも受診結果を報告した。

○2月20日、Aさんの左腕の腫れや内出血が依然として改善せず、腕を動かす際には痛みを表現するように顔をしかめることがあることから、ご家族とも相談の上、Zクリニックを受診することにした。同行した管理者がAさんの状態を詳細に説明し、レントゲンだけでなく、CTの検査を実施した結果、「骨折」と診断された。医師からは「骨折しにくい部位でいろいろな要因が考えられるが、骨も弱くなっていて折れやすい状態にある」と説明があった。しっかりと固定しないと治らないとのことで、シーネ固定を行うことになった。

○受診後、ご家族に経過を報告したところ、「関節炎と診断されたにもかかわらず、皆さんが気にかけてくれて骨折だとわかってよかった」と感謝されたが、一方で「なぜ骨折をしたのか、きちんと調べて報告してほしい」との要望もあった。

出典：『画像診断まとめ』
https://xn--o1qq22cjlllou16giuj.jp/

皆さんで考えてみましょう！

Q．トラブル予防の観点から、何ができたでしょうか？

入居者がいつのまにか骨折をしていた事例

入浴介助中に異変に気づき、「尺骨鉤状突起骨折」が判明

今回のトラクレ事例の対応から学べることを考えてみましょう！

この事例の対応のポイント

今回のトラクレ事例の対応のポイントを3つあげてみました。これ以外にも様々なポイントが考えられると思います。みなさんも意見を出し合ってみてください。

ポイント①：Aさんの左腕の異変に気づいた後の対応

- 左腕の異変を発見した後、速やかに看護師に連絡し、緊急時マニュアルに従って協力医療機関へ連絡し指示を仰いだ。
- ご家族への連絡もマニュアルに沿って行い、電話はつながらなかったが、Aさんに変化があった時にはいち早くご家族に連絡する姿勢を示した。

ポイント②： Aさんの状態に疑問を抱き、別の医療機関を受診

- 当初は関節炎との診断であったが、ケアスタッフと看護師がAさんの状態を観察する中で、骨折の可能性を疑い始めた。
- 骨折部位は発見が難しい部分であったが、これまでの経過を医師に丁寧に説明することで、正しい診断を得ることができた。

ポイント③： Aさんの骨折の原因究明と再発防止策の検討

- Aさんの腕に異常が見られなかったと確認できる時間（3月16日19時）まで遡り、実施した介助内容を洗い出して、スタッフの介助方法（手技）に問題はなかったか確認を行った。
- 「腕の曲げ伸ばしの介助方法」や「車椅子乗車時の姿勢保持」に問題があったのではないかと仮説を立て、作業療法士からもアドバイスを受け、スタッフ間で介助方法の統一を図った。
- 以上の取り組みをご家族に報告し、同意を得た。

どんなに注意をしていても原因不明の事故が起こる可能性はゼロではありません。「原因不明」で終わらせるのではなく、事故原因を推測し、そこに向けた再発防止に取り組みましょう。
また、ご利用者に対する職員の観察力を磨くこともとても大切です。

＜情報提供元＞
東京海上日動ベターライフサービス株式会社
ソリューション事業部

◆許可なく、転送・転載・複写はご遠慮願います。